マリ文書における ḥa.na の解釈をめぐって

“ḥa.na” in the Mari Texts: An Examination

大 西 庸 之^{*}
OHNISHI Tsuneyuki

ABSTRACT The term “ḥa.na” found in the Mari texts from the Old Babylonian period has been interpreted as a proper noun referring to a “Hanean”. However, in his paper of 1992, J.- M. Durand concluded that ḥa.na did not designate a certain ethnicity, but was used as a common noun meaning “nomad” or “bedouin”. Since then his explanation has been generally accepted. Meanwhile D. E. Fleming took ḥa.na as Sim'al pastoralists, and W. Heimpel took ḥa.na in three ways: (1) the ancestral tribal unit, (2) nomad or pastoralists, and (3) Sim'al pastoralists. But is it possible to consider ḥa.na as meaning a “nomad” or “bedouin” or “Sim'al pastoralist”?

As Heimpel wrote, it is clear from a number of the *kispu*m-rituals and the Assyrian King List that ḥa.na designates a certain group of tribes claiming common ancestry among the northern Mesopotamian nomads (e.g., *hana Yamin(a)*, *hana Sim'al*, *pursāt hanû*). I think it probable that through this consciousness of unity, the nomads in northern Mesopotamia called themselves “Haneans”. Namely, the term ḥa.na was the general term for those nomadic tribes: accordingly, the term ḥa.na must be considered as a proper noun, “Hanean”.

In the administrative texts of Mari, the majority of names of tribes (Yamin and Sim'al) and of clans (*gā'um*) appear in designations of individuals. ḥa.na also appears thus. However, in about half of the texts, ḥa.na does not refer to personal identity, especially when mentioned among occupational names. In these cases, ḥa.na is clearly meant to be a common noun, a “pastoralist”. Moreover, the texts of *tēbibtum* (census) employ the term ḥa.na to designate nomads in general in the target region of the census.

From these observations, I argue that the term ḥa.na was originally used as proper noun referring to a “Hanean” and that from it a common noun was derived with the meaning “pastoralist”. However, it does not seem that

* 中央大学大学院博士課程後期課程
Ph. D. Student, Chuo University

the word meant a “Sim'al pastoralist”.

I. はじめに

マリ文書の中に頻繁に現れ、「ハナ人」という個別の遊牧民族集団と見なされていた ⁽¹⁾ ḥa.na は、1992年にデュランによって「遊牧民 (nomades)」, 「ベドウィン (bédouin)」と解釈され、⁽²⁾ 現在では、このデュランの説が ḥa.na に対する最も一般的な解釈として受け入れられている。その後、ハインペルとフレミングは、デュランの説に賛同する一方で、⁽³⁾ ḥa.na をシマル人と関連させて解釈することが可能であるとした。これに対し、アンバルは、⁽⁴⁾ ḥa.na には包括的名称としての「ベドウィン」と特定民族集団としての「ハナ人」という2通りの用法があったとする。そしてアンバルは、⁽⁵⁾ ḥa.na を特定の民族名ではなく包括的な普通名詞として使用することは、文書の理解に正確さを欠くことになるのではないかと、⁽⁶⁾ ḥa.na を遊牧民やベドウィンといった普通名詞とのみ解釈することへの問題点を指摘した。

これまでの ḥa.na の研究を省みると、利用されてきた史料のほとんどが書簡、王碑文であり、行政経済文書における ḥa.na の用法が十分検討されてきたとは言い難い。本論では、⁽⁷⁾ ḥa.na の解釈に関するこれまでの研究の問題点を整理し、これまであまり利用されることのなかった行政経済文書における ḥa.na の使用法の分析をまじえ、マリ文書に記されている ḥa.na がいかなる意味で使用されていたのかを明らかにしたい。

II. ḥa.na に関するこれまでの研究

デュランが遊牧民説を提唱する以前に、ゲルブは、*Hana Yamin(a)* や *Hana Yamḥammām* のように、⁽⁸⁾ ḥa.na が他の部族名と共に使用されている場合は、一般的な意味での「遊牧民」や「ベドウィン」の意味が含まれていると主張した。このゲルブの見解に対し、デュランとシャルパンは1986年の共著論文において、「この解釈を採ると、⁽⁹⁾ ḥa.na は民族集団ではなく、生活スタイルを示すことになる」と反論し、M.5172にある「*ḥana ḥibrum ša nawēm* (宿営地の ⁽¹⁰⁾ ḥa.na の仲間)」の表現は、明らかに遊牧民を示した表現であるが、その一方で、定住している ⁽¹¹⁾ ḥa.na の仲間の存在も示しており、⁽¹²⁾ ḥa.na は遊牧民を意味していないと述べている。この時点では、彼らは、⁽¹³⁾ ḥa.na をヤミン人とシマル人の総称

であると考え、また、「ハナ人」という個別の民族集団の存在も認めていた。⁽⁸⁾

ḥa.na を両義的に解釈していたデュランは、1992年の論文でその見解を変え、⁽⁹⁾ ḥa.na を「ベドウィン」という一般名詞と解釈した。デュランは、ヤハドゥン・リムの称号「マリとシマル人たちの地の王」とジムリ・リム（ヤハドゥン・リムも使用している）の称号「マリとベドウィン（ḥa.na）の地の王」は、アッカド人といわゆるハナ人と呼ばれた人々を抱合する表現であるとする。さらにこのアッカド人と ḥa.na という対比は、「あなた（ジムリ・リム）がベドウィン（ḥa.na）の王であると同時に、あなたはアッカド人の王でもある」と「（ジムリ・リムは）アッカド人とアムル人の王」という2つの表現と通じるものがあることから、⁽¹⁰⁾ 「ベドウィン（ḥa.na）」と「アムル人」は置き換え可能であり、なおかつ両者ともに「ベドウィン」に属するものであるとする。それゆえに、「ハナ人」という民族は存在せず、⁽¹¹⁾ ḥa.na は「テントに住む者たち」を示す記述上の呼称（*épithète descriptive*）であると述べている。1998年の著書では、ヤミン人が主要な地域では、ḥa.na はヤミン人と理解することができ、上ジャジーラから出た書簡では、⁽¹²⁾ ḥa.na はシマル人とすることができ、従って、⁽¹³⁾ ḥa.na が具体的に何を指すのかは、どの地域の ḥa.na が話題となっているのかによって決まる、という立場を取った。

1998年以降のデュランの見解を受け、ハインペル、そしてフレミングは ḥa.na をシマル人と関連付けて論じている。ハインペルは、ḥa.na には(1)「ヤミンやシマルなどの遊牧集団が、自身をその子孫であると認識している共通の先祖部族」、⁽¹⁵⁾ (2)「部族的アイデンティティに関わりなく、牧羊民（pastoralists）もしくは遊牧民（nomads）」、(3)「シマル系牧羊者（Sim'al pastoralists）」の3つの意味を持つと述べている。第三の意味の根拠として、ハインペルはジムリ・リムがシマル出身であること、そして、ヤハドゥン・リムの2つの称号「マリと ḥa.na の地の王」と「マリとシマルの地の王」を対置させ、⁽¹⁶⁾ ḥa.na=シマルという解釈を引き出している。

フレミングの ḥa.na の解釈は、遊牧民全般を表すというよりはむしろ、特定の遊牧部族の中の牧羊者達、つまり、定住者から離れ、羊の群れと共に暮らす部族の構成員に特化した呼称であり、ジムリ・リム治世下では、ḥa.na は「シマル人の中の移牧に携わる牧羊者（mobile Sim'alite pastoralists）」を指していたとする。そして、マリ文書の大部分がシマル出身のジムリ・リム王とその王宮

からのものであり、シマル出身という王の立場から書かれたこれらの史料にある ḥa.na は「シマル人」と解釈すべきであるとする。例外として、シマル人その他のステップ地帯居住者との区別が必要な場合にのみ、シマル人以外の部族集団にも ḥa.na が用いられ、これ以外で ḥa.na がシマル人以外を指す場合は、ジムリ・リムとシマル人以外の者による用例であるとする。⁽¹⁷⁾

確かに、ḥa.na が「遊牧民」を指していると思われるケースは存在しており、この点に異論を挟む余地は無いだろう。しかし、ḥa.na をシマル人と関連付けているハインベルやフレミングの見解には大きな問題点が存在する。まず、この解釈の根拠として、ヤハドゥン・リムとジムリ・リムがシマル出身であることを挙げているが、シャムシ・アグド 1 世治世に関しては史料に基づいた十分な議論が行われていないのである。⁽¹⁸⁾ シャムシ・アグド 1 世のキスプム儀式の史料は、⁽¹⁹⁾ シャムシ・アグド 1 世と ḥa.na や遊牧氏族の 1 つであるヌムハーとの関連を明確に示しているが、シマル人との関連を指摘するような史料は存在しておらず、シマル人を ḥa.na と呼ぶ特別な理由はないのである。また、ḥa.na とシマル人の主要な活動領域がともにハブル上流域、すなわちイダマラツであることも ḥa.na をシマル人とする 1 つの要因であろう。⁽²⁰⁾ デュランが示したように、イダマラツとの結びつきが明らかに認められる場合、ḥa.na がシマル人である可能性は高いと言える。しかし、上記のような特定地域との関連が記されていない ḥa.na に関しては、たとえそれがジムリ・リム治世下の史料であったとしても、単純にこれを「シマル人」と解釈すべきではない。当然のことながら、コンテキストや他の史料との比較により、そこに記されている ḥa.na が何者であるのかを逐一検討しなくてはならないのである。

III. 遊牧部族成員のアイデンティティ

行政経済文書や一部の書簡などでは、遊牧民の同定や出自を示す際に、*gā'um* が使用されることが多い。この *gā'um* は「氏族 (clan)」と訳されるように、ヤミンやシマルといった部族の下位の構成要素、またはグループを指すと考えられている。しかし、時には遊牧民のアイデンティティを示すのにヤミンやシマルといった部族名が使用されることがあり、ḥa.na と記されている場合もある。この章では主に行政経済文書を用い、遊牧民の個人のアイデンティティを示す際の氏族構成要素を意味する各レベルの用語例を比較、分析することで、

ḥa.na がいかなる意味で用いられていたのかを見ていきたい。

1. *gā'um*

A.2560 では、シャムシ・アダド 1 世が「(川を) 渡る ḥa.na は何者であるのか。ヤミン人であるのか、シマル人であるのか。彼らの氏族 (*gā'um*) は (何であるのか)。(完全な情報を私の許に書き送りなさい。)⁽²¹⁾」と ḥa.na の調査を命じていたことが記されている。このことから、シャムシ・アダド 1 世治世下においては、ヤミンとシマルは、ḥa.na というカテゴリの中に含まれ、この両者をさらに詳しく区分する下位のカテゴリが *gā'um* であったことが分かる。

この書簡において、シャムシ・アダド 1 世が最終的に知りたい情報が「彼らの氏族 (*gā'um*)」であったことは注目に値する。これは、個々の遊牧民の行政上最も重要なアイデンティティが ḥa.na でもなければ、ヤミンやシマルといった *gā'um* の上位カテゴリである部族でもなく、*gā'um* であったことを示している。ジムリ・リム治世中においては、マリとツプルムの駐屯兵への油の支給を記した行政経済文書である TEM, Tablet AB⁽²²⁾ は、*gā'um* によって個々人の出自を明記している。ARM III 50⁽²³⁾では、「上 (北) の地」からやって来た 3 人のヤミン人に関して、それぞれの所属 *gā'um* (ウブラップーム、ヤフルーム、ワナヌーム) を明記している。*Florilegium Marianum* III 136⁽²⁴⁾では、ある逃亡者に関する情報が示されており、ここでは、ヤマハンムーという *gā'um* 名の他に、そのスガークム⁽²⁵⁾の名前、さらには逃亡者の財産まで記されている⁽²⁶⁾。このように、両時代を通じて、支配者は遊牧民を *gā'um* によって同定していたのである。フレミングは *gā'um* をシマルのみに特有の社会構造であり、ヤミン社会においては *gā'um* に相当する組織は *li'mum* であるとしている⁽²⁷⁾。しかし、前述の A.2560 からはヤミンにも *gā'um* が存在していたことが示されており、たとえフレミングが述べているようにウガリトやエマルでの *li'mum* が「人々」もしくは「氏族」を示していたとしても、マリ文書での使用例は少なく、これがヤミン人にのみ特有のものであったとするには、まだ慎重に検証を重ねる必要があるだろう。

2. 行政経済文書におけるアイデンティティ

現在刊行されているマリ行政経済文書⁽²⁸⁾における ḥa.na、ヤミン、シマル、そして *gā'um*⁽²⁹⁾の言及例は 131 例ある。その内訳は、ḥa.na が 45 例、ヤミンが 8 例、シ

マルが2例、*gā'um* が76例であった。このうち個人名の後に出自等のアイデンティティを示すために使用されるケースは、*ḥa.na* が25例、ヤミンが5例⁽³¹⁾、シマルが1例⁽³²⁾、*gā'um* が66例であり、*gā'um* の使用例が最も多い(表1参照)。また、4つの語のそれぞれの全言及例に占める個人のアイデンティティを表すための使用例の割合を見ても、*gā'um* の場合が最も大きい(約87%)。したがって、個人の出自を示す際には *gā'um* を使用するのが一般的であったと判断できる。*gā'um* の上位カテゴリであるヤミンやシマルが少数の例しかないのは、このような *gā'um* の使用法があったためであろう。

(表1)

	<i>ḥa.na</i>	ヤミン	シマル	<i>gā'um</i>
全言及数	45	8	2	76
個人のアイデンティティを表す用例数	25	5	1	66

gā'um の特徴的な使用法としては、地名のように使用されているケースが存在していることが挙げられる。*gā'um* が地名として使用されていると考えられる例としては、テービブトゥム(詳しい意味については後述する)の実施対象(XXIII 427)、サッガラトゥム地区とテルカ地区の各町の収穫リスト(XXIII 69)などがある。マリ行政経済文書において、同一文書内で *gā'um* が他のカテゴリの名詞(地名、職名など)とともに使用されている文書の数、21あり、そのうち20の文書で地名と共に使用されている(言及数では76例中44例)。これは、各 *gā'um* の成員がそれぞれ特定の地域ないし町で生活しており、そこを拠点として移牧を行っていたため、*gā'um* が地名と同じように使用されていたと考えられる⁽³³⁾。

ヤミンとシマルの言及数が少数であるのに対し、この両者を含んでいると見られる *ḥa.na* の使用例は多く、*gā'um* と同様に個人の何らかのアイデンティティを示す際に使用されている例も多い。TEM III では人名とその所属する *gā'um* が記され、最後に *ḥa.na* の者(*lú ḥa-nu-á*)としてまとめられている。このことから、*ḥa.na* にも *gā'um* が存在していたことを窺わせる。しかし、同じく *gā'um* が存在しているヤミンやシマルとの使用例の違いは、*ḥa.na* とヤミンやシマルが根本的に異なる集団であったことを示しているのではないか。これに関して *ḥa.na* の使用例の中に職名と共に使用されている例がかなり存在

していることに注目したい。人名リストである *ARM* XXIII 235 や土地台帳と
思われる XXIV 6⁽³⁵⁾ では、*ḥa.na* は様々な職名と共に、個人のアイデンティティ
を示す際に使用されている。食物の支給を記した史料である *ARM* XXI 57⁽³⁶⁾、
XXI 83⁽³⁷⁾、そして XXIII 494⁽³⁸⁾ では、*ḥa.na* 以外の支給対象には職名が使用されて
おり、これらの文書に出てくる *ḥa.na* が個人の出自を示す語として使用されて
いるとは考えにくい。特に注目すべきは、XXI 57 と 83 で、「職人 (*ummiānum*)
と *ḥa.na* の食事のため」と、職人と *ḥa.na* をまとめて 1 つの支給対象としてい
るのである。このような使用例は、*ḥa.na* が普通名詞として、職名に準ずる用語
として使用されていたことを窺わせるものであろう。食物の支給を受けている
ḥa.na は、王宮に属している小家畜を飼養する者や王宮から委託を受けて小家
畜を率いる者を示していた可能性が大きい。

gā'um の使用法とは異なり、個人のアイデンティティを示す以外での *ḥa.na*
の言及数は半数近く (20 例) に及び、中でも上述の *ARM* XXI 57, XXI 83, XXIII
494 のように、物品の支給対象として使用されるケースが 13 例存在する⁽³⁹⁾。また、
地名、都市名だけでなく職名とともに使用されていることも特徴的である。こ
のように、行政経済文書での *ḥa.na* の使用例を分析すると、*ḥa.na* はヤミンや
シマルのような個別の民族集団ではなく、職名のように、小家畜の飼養に従事
する者、ないし、「牧羊者」のような普通名詞に近い形で使用されていると考え
られる。

IV. テービブトゥムにおける *ḥa.na*

テービブトゥムとは、一般的にはセンサス (census) と訳され、定住民、遊牧
民の区別無く、地区や都市、もしくは兵士などの集団に対して行われる人口調
査のことである。そして、この調査結果を記した台帳は、王宮の文書庫に保管
され、必要に応じて適宜使用されていた⁽⁴⁰⁾。ここで取り上げる史料はそのほとん
どが書簡であるが、王からの実施命令と実施者からの報告の 2 つに区別して検
証することで、テービブトゥムに関連する書簡が、他の書簡よりも *ḥa.na* とい
う語をテクニカル・タームとして使用していることが分かる。

テービブトゥムに関する書簡を見てみると、シャムシ・アダド 1 世治世下
での *ḥa.na* のテービブトゥムは、メンビダのハシュムに集まっている全ての
ḥa.na (*ARM* I 37)、カトゥゥナン地区とその *ḥa.na* (*ARM* I 82)、水の

あるところに集められた ḥa.na (ARM II 1), ḥa.na と国土のテービブトゥム (ARM IV 57), ナフル, タルハユム, キルダハト, アシュナツクムの諸地区に
いる ḥa.na (ARM V 51), ḥa.na のテービブトゥム (ARM I 87) の言及が見ら
れる。他にはヤミン人へのテービブトゥム (ARM I 6), 強制移住者のテービブ
トゥム (ARM V 35) などがある。一方, ジムリ・リム治世下には, ḥa.na を対
象としたテービブトゥムの例は存在せず, ヤミン人を対象にした例が ARM III
21 に見られ, ARM XIV 64 には, サフルーのアムナヌーム氏族に対するテービ
ブトゥムが記されている。その他は国土 (*mātum*; ARM I 129, ARM II 18,
ARM IV 7+M.5737), 地区 (*ḥalṣum*; ARM I 62, ARM IV 83, ARM V 45),
ユーフラテス河岸 (ARM II 130), あるいは, 兵士達 (ARM I 7, ARM I 36)
などが対象となっている。

以上のように, テービブトゥムは, 国土(全土)や地区, 町といった地域,
あるいは, ḥa.na, ヤミン, 兵士達というようにある種の集団を対象として実
施されるものであった。書簡では実際の実施状況について述べられていない
が, 実施の実態は中田氏が指摘するように個々の集落や町を単位として行わ
れ, 地区や国土単位にまとめられたものと想定される。⁽⁴¹⁾そして, この想定が間違
いでないことは, 行政経済文書によって明確に示すことができる。ARM XXIII
⁽⁴²⁾427 はサッガラトゥム地区で行われたテービブトゥムのリストである。破損
が多く詳細は不明ながら, コラム 4 の後半部分には, テービブトゥムが行われ
た地名が記されている。ここでは, 数多くの地名と共に *gā'um* 名も記されてい
る。このことは, 遊牧民が氏族 (*gā'um*) 単位, つまり, そのスガーグムが管理
する町とそこに生活の基盤を置く氏族(移牧従事者と定住者を含む)を基本単
位として管理されていたことを示している。ユーフラテス河岸のヤミン人の町
の分布を見ると,⁽⁴³⁾基本的には, 1つの町に1つの氏族が関連していることが分か
る。遊牧部族は, 氏族単位で, 1つないし複数の町邑に定住し, その一部が季
節的な移牧を行っていたのであろう。そして, 遊牧部族に対する管理は, テー
ビブトゥムの実施例からも分かるように, *gā'um* 単位で行われ, これが遊牧民
を *gā'um* によって同定した最大の理由であったと考えられる。

このような実際の実施状況にもかかわらず, テービブトゥムの実施命令は,
国土や地区といった比較的広大な地域に対し出されるものであった。テービブ
トゥムに関する史料で, 特定の遊牧集団に関するものとしては, ARM I 6 の「ヤ
⁽⁴⁴⁾

ミン人へのテービブトゥム』と *ARM* XIV 64 の「サフルーのアムナヌーム氏族
に対するテービブトゥム」がある。*ARM* I 6 からは、ヤスマハ・アッドゥが父
親であるシャムシ・アダド 1 世に対し、「ヤミン人に対するテービブトゥム」と
「ユーフラテス河岸の耕地の再分配とテービブトゥム」⁽⁴⁶⁾ に関して、この書簡以
前にも書簡を書き送っていたことが分かる。おそらく、シャムシ・アダド 1 世
は、ヤスマハ・アッドゥに彼の地区なり国土なりに対するテービブトゥムを命
じていたのであろう。この命令に対し、ヤミン人のテービブトゥムとユーフラ
テス河岸の耕地再分配、特に ḥa.na の耕地保有が問題となり、父に対処法を相
談したと考えられる。それに対するシャムシ・アダド 1 世の返答が、*ARM* I 6
の書簡であった。したがって、ここで記されている「ヤミン人のテービブトゥ
ム」は、ヤスマハ・アッドゥが王に相談するために書き送った書簡の文言の一
部を、返信の際に引用したものであったと考えられる。*ARM* XIV 64 では、ヤ
ッキム・アダドがテービブトゥムの台帳をすでに作成し、ジムリ・リムの許に
送ると記している。このテービブトゥムは、彼が管轄する地域の兵士達のテー
ビブトゥムであった。しかし、「サフルーのアムナヌーム氏族の兵士のテービブ
トゥム」に関しては、その実施について彼らのスガーグムに対し書簡を書き送
っているが、彼等がやって来ないと、ジムリ・リムに報告している。この例も
ARM I 6 の例と同様に、テービブトゥム実施命令ではなく、個々の実施状況に
関する王への報告であると思われる。キブリ・ダガンによる実施の報告である
ARM III 21⁽⁴⁷⁾ では、町ごとにテービブトゥムを実施し、台帳に記載し、それを送
ることが報告されている。

これに対し、ḥa.na のテービブトゥムの場合は、国土や地区といった比較的広
大な地理的単位で実施が命じられている。そして、ḥa.na に関するテービブトゥ
ムは、他の遊牧部族に比べ、格段にその言及例が多いことが指摘される。ヤミ
ン人に関しては数例見られるが、シマル人に関しては言及が無い。もちろん史
料の出土の偶然性によるとも考えられるが、テービブトゥムに関連する書簡を、
王からの実施命令と王への実施報告とに分けて検証することによって、次のよ
うなことが言える。すなわち、遊牧民に対するテービブトゥムでは、実施対象
地域内にいる遊牧民を、一括して ḥa.na と呼び、実施命令が出されていたので
はないか。しかし、個々の実施や台帳への記載は、上記の史料が示すように、
gā'um 単位で行われたと考えられるのである。

このように、テービブトゥム実施命令に関する史料から、シャムシ・アグド 1 世治世下においては、*ḥa.na* が遊牧民全般を包括的に示すために使用されていたことが分かる。ジムリ・リム治世下においては、*ḥa.na* に対するテービブトゥム実施命令を示す史料がないため、明確なことは言えないが、引き続きテービブトゥムが実施されていたことを考えれば、*ḥa.na* の用法もシャムシ・アグド 1 世治世下と同様であったと想定することは不可能なことではないだろう。

V. 遊牧部族の総称としての *ḥa.na*

1. ヤハドゥン・リムの王碑文に見られる *ḥa.na*

王碑文で使用されているヤハドゥン・リム称号は、*RIME* 4.6.8.1 の「マリ、
トゥトゥル、および *ḥa.na* の地の王」(*lugal ma-ri⁽⁴⁸⁾ tu-ut-tu-ul^{ki} ḥa.na*)
と *RIME* 4.6.8.2 の「マリと *ḥa.na* の地の王」(*lugal ma-ri⁽⁴⁹⁾ ḥa.na*)、
そして彼の娘の碑文である *RIME* 4.6.8.6 に記されている「マリとシマルの地の王」(*lugal ma-ri^{ki} ḥa.na*) の 3 つである。前者 2 つの
称号と *RIME* 4.6.8.6 の称号は、確かに表現上は類似したものがある。しかし、
この類似のみで *ḥa.na* とシマルを同一視すべきではないだろう。ヤハドゥン・
リムが「*ḥa.na* の地の王」を称している碑文においては、彼が *ḥa.na* を打ち破
りユーフラテス河岸を支配したことが強調されている。碑文中では、「私 (ヤハ
ドゥン・リム) に対して反抗した 7 人の王、すなわち *ḥa.na* の『父達 (指導者)』
を私は打ち破った。私は彼らの地を併合した。⁽⁵⁰⁾」[全ての *ḥa.na* の『父達』が建
てた *ḥa.na* の軍隊の都市ハマンを、彼 (ヤハドゥン・リム) は破壊し、瓦礫の
山を築いた。彼は彼らの王であるカツリ・ハーラを打ち破った。彼らの人々を
運び出し、彼はユーフラテス河岸を征服した。⁽⁵¹⁾]と記され、*RIME* 4.6.8.1:7-8
でヤハドゥン・リムは「ユーフラテス河岸の征服者」と称されている。⁽⁵²⁾従って、
ここで記されている「*ḥa.na* の地」とはユーフラテス河岸を示していたと考える
ことも可能なのである。

さらに、ヤハドゥン・リムの称号と彼の碑文に記されているヤミン系の王の
称号とを比較してみると、前者では、マリとトゥトゥルには限定詞 *ki* を付し、
ḥa.na やシマルは *mātum* と組み合わせて使用している。一方、ヤミン人の王達
にも都市名に限定詞 *ki* を付し、*gā'um* は *mātum* と組み合わせて使用してい
る。⁽⁵³⁾このヤミンの「*mātum*+氏族名」は、*ḥa.na* の活動領域であったユーフラテ

ス河岸が「ḥa.naの地」とされたように、それぞれのヤミン系 *gā'um* の主要な活動領域を示したものであったと想定できる。ポストゲートは、アムル系の支配者はその人的支配に主眼をおいており、領域的なものとしてのみ定義すべきではない、と述べている⁽⁵⁴⁾。このポストゲートの見解に従うと、「*mālum*+氏族名／部族名」は、氏族民や部族民の主要活動領域だけではなく、その活動領域内に住む人々を指していると考えられる。以上のことから、ヤハドゥン・リムの碑文中にある「ḥa.na の地」とは、その碑文の内容から見て、ユーフラテス河岸であったことは間違いないであろう。しかし、ヤハドゥン・リムが使用した「ḥa.na の地」は、実際に支配したユーフラテス河岸を指すだけではなく、そこで生活する ḥa.na と呼ばれていた人々の支配をも意味していたのである。

アムル人を対象とした特有の表現として、その王、もしくは族長を「アムルの地の父」(ad.da kur.mar.dū) と表すことがあり、*RIME* 4.6.8.2:16 においても「ḥa.na の父達」と記されている。しかし、「アムルの地の父」という称号は、メソポタミア南部のラルサやバビロンで見られる称号であり⁽⁵⁵⁾、マリやアッシリアでは使用されていない。デュランは *ARM* VI 76 の「ḥa.na とアッカド人の王」と A.489 の「アッカド人とアムル人の王」という表現から、ḥa.na とアムルを「ベドウィン」に属するものとしている。この表現は、定住民＝アッカド人と遊牧民＝ḥa.na／アムル人を対比的に表している。同様の表現として、バビロンのハンムラビの称号である「全アムルの地の王」⁽⁵⁶⁾と、ヤハドゥン・リムの称号である「ḥa.na の地の王」が挙げられ、メソポタミア南部で使用される「アムル」は、北部では ḥa.na と表現されていたとも考えられる。アムル系王権の人的支配という観点から見た称号の解釈と ḥa.na とアムルの表現比較から、ḥa.na はメソポタミア北部、つまりユーフラテス中流域からイダマラツ、おそらくザルマクムをも含めた地域で遊牧生活を送っていた遊牧民全般を示していたのであろう。その中にはヤミンやシマル、そしてヤムトバルなど様々な部族集団が含まれていたのである。ハインベルはヤハドゥン・リムの称号を対置させ、ḥa.na＝シマル人と述べているが、上述した点から見ても、彼の見解を受け入れることはできないだろう。

2. 遊牧部族間の同族意識を示す ḥa.na の表現

書簡の冒頭などで、良好な関係、親密な関係を表現するための方法として利

用されている「兄弟」という表現は、遊牧部族間においても使用され、例えば、ARM I 6 9-13行の「ヤムハドの国に居る、彼ら（ヤミン人）の兄弟であるラバヤ人が苦々しく思い」というように使用されている。このような表現や、ARM XXVIII⁽⁵⁷⁾ 36の「ヤムトバルと ḥa.na・シマル」が「父（祖先）を同じくする」、A.3572⁽⁵⁸⁾の「ヤムトバルとシマル」は「ḥa.na から枝分かれした」という表現は、ハインベルが示した「共通の祖先としての ḥa.na」という、遊牧部族民が持っていた共通の認識を示していると考えられる。また、マリ文書に度々記される表現である *hana Sim'al* や *hana Yamin(a)* といった、ḥa.na を部族名の前に付した表現についても、「共通の祖先としての ḥa.na」という認識に基づいた表現であったと考えられる。ヤミンとシマルは、「右（南）の者」と「左（北）の者」という表現で対比される集団であり、両者は対を成す集団であった。したがって、ヤミンもまたシマルやヤムトバルと同様に ḥa.na を媒介とした同族意識を共有した集団と考えることができる。このような共通の祖先である ḥa.na を媒介とした同族意識が根本にあったため、前節で示したように、ḥa.na はメソポタミア北部に住む遊牧民全般を示すことができたのであろう。彼らは、先祖代々自らを ḥa.na と認識しており、アムル系の「ハナ族」という1つの大きな民族集団であったと見なすことができるのである。

VI. おわりに

行政経済文書における ḥa.na の使用法を分析すると、ḥa.na は個人の出自を示すために使用されておらず、職名に相当する用語として使用されていたことが明らかとなった。遊牧民は *gā'um* によって同定されていたと考えられ、テビプトゥムとの関連でも示したように、*gā'um* は当時の支配者が遊牧民を管理する上での最小単位と考えられる。このことから、ḥa.na は *gā'um* によって構成されるヤミンやシマルといった「部族」とは異なったカテゴリーの集団であることが分かる。行政経済文書で用いられている ḥa.na が様々な職名とともに使用されていることは、ḥa.na が普通名詞的に「移牧従事者」、もしくは「遊牧民」の意で使用されていたことを示しているのである。フレミングは部族集団の中の牧羊従事者を ḥa.na と呼んでいたとしている。確かに、当時の遊牧民が定住者と季節的な移牧従事者として構成されていたことを考慮すれば、部族内の移牧従事者こそ、行政経済文書で使用されているような職名としての ḥa.na にふさ

わしい者であるかもしれない。しかし、テービブトゥムに関する書簡やヤハドゥン・リムの王碑文における ḥa.na は、遊牧民を包括的に指しており、ḥa.na が部族内での移牧、定住の別を表す用語であったとは考えにくい。ḥa.na は定住、移牧の別を問わず遊牧民を包括的に指す一方で、職業的に小家畜の飼養を生業とする者、移牧従事者を指す場合もあったのである。包括的に遊牧民を示すことは、ハインペルが述べているような、共通の祖先としての ḥa.na という認識に起因するものであろう。このような認識が ḥa.na を介した同族意識を生み、これによって、メソポタミア北部に暮らす遊牧民は、自らを ḥa.na と認識していたと考えられる。それ故、遊牧民全般を指すために ḥa.na が使用されたのであろう。行政経済文書での職名に準じた使用法は、小家畜の飼育、移牧という特徴のみを引き出した、特殊な使用法であったと思われる。

1992年のデュランの解釈以降、ḥa.na は「遊牧民」、「ベドウィン」と訳されてきた。たしかに、訳語的には「遊牧民」、「ベドウィン」でも支障はないのであろうが、メソポタミア北部に暮らす遊牧民が ḥa.na を介した同族意識を持ち、自らを ḥa.na と認識していたことを考慮する必要があるのではないだろうか。デュランとシャルパンが、1986年の共著論文で、ḥa.na をヤミン人とシマル人の総称としていたように、ḥa.na はメソポタミア北部の遊牧部族の総称として「ハナ人」ないし「ハナ族」と理解することができるのである。

注

- (1) J.-R. Kupper, *Les nomades en Mésopotamie au temps des rois de Mari*, Paris, 1957, XVIII; 1-46 を参照。この著書では、ḥa.na はユーフラテス中流域を支配していた定住化の進んだ遊牧民 (nomades) とされており、この見解がデュラン以前の ḥa.na の解釈の主流となっていた。
- (2) J.-M. Durand, "Unité et diversités au Proche-Orient à l'époque Amorrite", D. Charpin & F. Joannès (éds.), *CRR A* 38, Paris (1992), 97-128. 本稿で使用する略号は、特に記さない限り、*Chicago Assyrian Dictionary* (=CAD), P, 2005, vii-xxvii に従う。
- (3) W. Heimpel, *Letters to the King of Mari: A New Translation, with Historical Introduction, Notes and Commentary*, Wiona Lake, 2003, 34-35. D. E. Fleming, *Democracy's Ancient Ancestors: Mari and Early Collective Governance*, Cambridge, 2004, 85.
- (4) M. Anbar, "Ḥanûm: nom ethnique ou nom générique?", Y. Sefati et al. (eds.), *An Experienced Scribe Who Neglects Nothing: Ancient Near Eastan Studies in Honor of*

Jacob Klein, CDL Press, Bethesda, 2005, 458-459. (以下“Ḫanûm”とする)

- (5) M. Anbar, “Ḫanûm”, 450-451.
- (6) I. J. Gelb, “The early history of the west Semitic peoples”, *JCS* 15 (1961), 37.
- (7) *nawûm* は, *CAD* N/1, 249-251 (*namû*) では, 1. 農耕地域の周辺にある遊牧民が居住する牧草地, 2. 牧草地, 都市周辺に広がる地域, とされており, 都市や農耕地域周辺にあった放牧地と解釈されている。しかし, メソポタミア北部の遊牧民は冬季(雨季)にステップ地域へ, 夏季(乾季)には村落へと季節的な移牧を行っており, 小家畜の放牧地である *nawûm* は, 都市や農耕地域といった定住地域付近にあったのではなく, 雨季の間彼等が滞在するステップ地域にあったと考えられる。従って, ここでは *nawûm* を「宿营地」と訳しておく。メソポタミア北部における遊牧民の小家畜を主とした移牧と, 彼らの居住地の関係については, J. T. Luke, *Pastoralism and Politics in the Mari Period. A Re-examination of the Character and Political Signification of the Major West Semitic Tribal Groups on the Middle Euphrates, ca. 1828-1758 B. C.*, The University Michigan, Ph.D. Thesis, 1965 を参照。
- (8) J.-M. Durand & D. Charpin, “«Fils de Sim'al»: Les origines tribales des rois de Mari”, *RA* 80 (1986), 154-155.
- (9) J.-M. Durand, *CRR* 38, 97-128.
- (10) *RIME* 4.6.8.6:3-4. (ヤハドゥン・リムの娘の碑文) *lugal ma-ri*^[ki] *û ma-at dumu si-im*·[*a-al*] (D. R. Frayne, *RIME* 4, Toronto, 1990, 610)
- (11) *ARM* VI 76: 20-21. [*šum-ma*] *lugal ḫa.na*·(*meš*) *at-ta* [*û š*] *a-ni-iš lugal ak-ka-di-im at-ta*
- (12) A.489, *lugal ak-ka-d* [*i-i*] *m û am-m* [*u-u*] *r-ri-im* (J.-M. Durand, *CRR* 38, 113, n. 137)
- (13) デュランは, *ḫa.na* は *ḪN'* (テントに住む者) を語源とした派生語であり, 「ḪA.NA」の表記法はアブソルートの形であると述べている。また, ヘブライ語の *ḥanāh* (テントを張る) と同じ語源を共有していると述べている (*CRR* 38, 113)。これに対し, アンバルはヘブライ語の *ḪNH* はテントではなく「キャンプを設営する」の意であろうとコメントしている (M. Anbar, “Ḫanûm”, 447)。
- (14) J.-M. Durand, *Documents de Mari II*, 1998, 418-419.
- (15) この根拠としてハインベルは, バビロン第一王朝のキスプム儀式において王から死者供養の贈り物を受け取る先祖の中に *ḫa.na* が記されていること, シャムシ・アダド 1 世の編纂とされるアッシリア王名表の「テントに住んでいた者」の部分の10番目の王に *ḫa.na* の名が登場すること, そして A.3572:2'-4' (J.-M. Durand, *CRR* 38, 114-116) に記されている「ヤムトバルとシマルは遠い昔から [……] 兄弟であり, *ḫa.na* から枝分かれした者 (*pu-ûr-sā-at ḫa.na.meš*) という関係である」という表現を挙げている (W. Heimpel, *Letters to the King of Mari*, 35)。デュランは, *pursātum* を「枝分かれした(民族)」と解釈しているが, このデュランの解釈に対して, アンバルは, デュランが示し

た ḥa.na の解釈である「包括的、非民族的とする理論に反している」と批判をし、この語の解釈としては、「その意味するところは不明」であるとしながらも、「シマル、ヤムトバルと ḥa.na との関係の鍵となる語であろう」としている (M. Anbar, “Ḥanûm”, 458)。

(16) W. Heimpel, *Letters to the King of Mari*, 29-36. ジムリ・リムがシマル出身であったことについては, J.-M. Durand & D. Charpin, *RA* 80, 150-151 に詳しく論じられている。

(17) D. E. Fleming, *Democracy's Ancient Ancestors*, 48, 85.

(18) シャムシ・アダド 1 世治世下に関して, フレミングは, ḥa.na の名は, ハブル川上流の特定の人々に対して, 定住, 非定住にかかわらず用いられており, 定住している ḥa.na という記述は, ジムリ・リム治世下におけるこの語の用語法からは矛盾したものであるとしている。その理由として「この用語 (ḥa.na) が, シャムシ・アダド 1 世, もしくはその周辺の者がある特定の部族集団に付けた呼称, もしくはそのような集団の自称」であるととする (*ibidem*, 88-89)。デュランも, ジムリ・リム治世下と比べ大きな変化が無ければ, シャムシ・アダド 1 世治世下においても, シマルとの関係が深い上ジャジーラの ḥa.na もシマル人であるとしている (J.-M. Durand, *Documents de Mari II*, 338-339)。

(19) M. Birot, “Fragment de rituel de Mari relatif au *kispu*”, B. Alster (ed.), *Death in Mesopotamia*, Copenhagen, 1980, 139-150 を参照。シャムシ・アダド 1 世治世のキスプム儀式の供物を受け取る祖先の中に, *lú ḥa.na.meš ia-ra-di ū a-na šu-ut nu-um-ḥe-e* とある。*yaradi* の意味は不明であるが, 西セム系の “*yrd*” を語根とする語 (意味は “descendre”) もしくは, *warādu* のアムル語形ではないかと述べている。

(20) ḥa.na に関しては, M. Anbar, *Les tribus amurrites de Mari*, Freiburg, Schweiz, 1991, 102-104, 177-191. シマルに関しては, *ibidem*, 115, 117, 204 を参照。

(21) (6) *um-[m]a-mi ḥa-nu-ū ša i-bi-ru* (7) *dumu.meš si-ma-a-al dumu.meš ia-mi-in* (8) *ga-a-šu-nu ma-an-nu-um* (9) *ṭe₄-em-šu-nu ga-am-ra-am* (10) *a-na še-ri-ia šu-up-ra-am* (D. Charpin & J.-M. Durand, *RA* 80, 180-182)

(22) M. Birot, “Trois textes économiques de Mari I”, *RA* 47 (1953), 121-130; “Trois textes économiques de Mari II”, *RA* 47 (1953), 161-174; “Trois textes économiques de Mari III”, *RA* 49 (1955), 15-31.

(23) 10-17: 「1 人のウブラプームの者, 1 人のヤフルームの者, (1 人の) ワナヌームの者, 合計 3 人のヤミン人 (1 *lú ub-ra-bu-u[m]* 1 *lú ia-ḥu-ur-r[u-u]m ū wa-na-nu-[um]* 3 *lú.meš an-nu-tum ša dumu.meš[i] a-mi-na*) が, 上 (北) から平和条約 (の締結) のために, ヤシム・マハルと共に到着しました。」

(24) 9-15: 「ヤマハンムーの者であるラワシム (^m*la-wa-si-im lú yu-ma-ḥa-mi-yu*) が逃亡しました。彼のスガーグムはダティ・リムです。我が主は, 彼の財産である 200 頭の羊と 5 頭のロバを没収すべきです。」 I. Guillot, “Les gouverneurs de *Qaṭṭunân*: nouveaux textes”, *Florilegium marianum* III, 1994, 286.

- (25) スガークムはマリの地方役人であり、自らが所属する集団、ないし地域の兵員、労働力の確保、逃亡者の防止などの法と秩序の維持を任されていた。スガークムに関しては、中田一郎「マリ王国地方行政の一側面について——スガークム制度を中心に——」『中央大学文学部紀要』32(1987), 1-33; I. Nakata, “A further look at the institution of *sugāgum* in Mari”, *JANES* 19 (1989), 113-118 をそれぞれ参照。
- (26) フレミングは、このテキストから、遊牧民を同定する際に必要な情報は、部族集団、所属氏族、そのスガークム名、財産規模の順であったとしている。D. E. Fleming, “The Sim'alite *gayum* the Yaminite *li'mum* in the Mari archives”, *Amurru* 3 (2004), 202-203.
- (27) D. E. Fleming, *Amurru* 3 (2004), 199-212; D. E. Fleming, *Democracy's Ancient Ancestors*, 43-63 を参照。
- (28) 対象となる史料は ARM VII, VIII, IX, XII, XVIII, XIX, XXI, XXII/1, XXII/2, XXIII, XXIV, XXV である。
- (29) ここで *gā'um* として扱っているものは、アビ・ナカル (*Abi-nakar*)、アムナヌーム (*Amnanūm*)、アムッルム (*Amurru*)、イバル・アフ (*Ibāl-ahū*)、ナハーン (*Nahān*)、ニハド (*Nihād*)、ラッブーム (*Rabbūm*)、ウブラブーム (*Ubrapūm*)、ワナヌーム (*Wananūm*)、ウェルーム (*Wer'um*)、ヤバスーム (*Yabasūm*)、ヤフルーム (*Yahurrām*)、ヤカリットゥ (*Yakallitu*)、ヤマハンムー (*Yamahammū*)、ヤリフ (*Yariḥ*) の15の *gā'um* である。
- (30) 言及数は全部で151例であったが、*ḥa.na* や *gā'um* の前に *sugāgum* や *lugal*, *zarri* などが記され、これらの語を修飾するために使用されている場合や破損などによりどのように使用されているのか不明な20例を除き、131例を分析対象としている。また、同一文書内で複数の言及例がある場合は、それぞれ個別に言及数として数えている。また、ジムリ・リムの年名に使用されているヤミンの記述は、分析の対象外としている。
- (31) ヤミンの例のうち女性の解放に関するものが4例ある：ARM XXIII 76:1-3:「シネナ、アブディが所有する女性、ヤミン人からの戦利品 (*ša sa-a[d]-d[i-im] ša dumu.meš ia-mi-na*)」, ARM XXIII 77:1-3: *ša sa-ad-di-īm ša dumu.meš ia-mi-na* 「アドゥム・リーニー、ヤミン人からの戦利品 (*ša sa-ad-di-īm ša dumu.meš ia-mi-na*)」, ARM XXIII 78:1-3:「アンム・リートゥム、ヤミン人からの戦利品 (*ša sa-ad-d[i-im] ša dumu.meš [ia-mi-na]*)」, ARM XXIII 421:1-4 「シネナ, *ayatum* (?), ヤミン人からの戦利品 (*ša i-na sa-di-īm ša dumu.meš ia-mi-na*)」。
- 残りの1例は衣服と弓の支給対象者の出自を示している：ARM XXI339:6-7:「1つの弓、ヤミン人である (*lū ia-mi-na*) イリー・ネヒムに」。
- (32) ARM XXV130:1-3:「1/3 マナの銀、シマル人であり、医者(?)の女(妻?) (*munus a-su-tim dumu.munus si-im-a-al*) であるマキヤの解放の代価として」。
- (33) 部族名と地名の関係については、I. Nakata, “A further look at the institution of *sugāgum* in Mari”, *JANES* 19 (1989), 117 を参照。

- (34) ここに記されている職名は, *lú.meš simug-a* (鍛冶職人), *lú.má.laḥ₅* (船頭), *ad.KID* (革製品職人), *lú.ázlag* (洗濯屋), *lú.sukkal* (大臣), *lú.nar* (演奏者), *kisalluḥḥu* (掃除人), *lú.nu.gi₃kiri₆* (庭師), *lú.šú-i* (床屋), *lú.kū.dím* (金, 銀鍛冶職人), *nagar* (大工) などである。
- (35) その他の職名は, *dub.sar* (書記), *neberi* (渡船夫), *sagi* (使用人頭), *lú.tabira* (金属加工職人), *lú.má.laḥ₄* (船頭), *lú.ašgab* (革製品職人), *lú.dam.gār* (商人), *šangūm* (神殿長), *nagārum* (大工) など。
- (36) 6-9:「2頭の牛, 12頭の羊, 職人達と *ḥa.na* 達 (*lú du[mu].meš um-me-ni ù lú.meš ḥa-[ni-i]*) の食料として」。
- (37) 11-13:「牛の肩肉……, 職人達と *ḥa.na* (*[dumu.meš um-me-ni ù lú ḥa-ni-i]*) の食料として」。
- (38) *ARM XXIII 494* での支給対象は, 市外のアンヌートゥム神殿にいる *ḥa.na* の食料 (*NÍG.gub lú ḥa.na.meš i-na é an-nu-ni-tim ša ka-wi-tim*), *ka-an-nim* (意味は不明), ベーレト・エカッリム神殿の料理人 (*lú.muḥaldim.meš ša i-na é ḏnin-ē-kal-tim*), ネルガル神殿の *ḥa.na* の食料 (*NÍG.gub ḥa.na.meš i-na é ḏnē.iri₁₁.gal*), 織物工場の庭の *ḥa.na* の食料 (*NÍG.gub ḥa.na.meš i-na ki-sa-al bi-ir-mi*)。
- (39) *ARM XXI 76* では牛肉の支給対象, *XXII 258* では貴金属の贈与対象, *XXV 590* では武器の支給対象として記されている。
- (40) テービプトゥムに関しては中田一郎「マリ文書に見られる *tēbibtum* について」『中央大学文学部紀要』35 (1990), 1-70; E. Kellenberger, “*tēbibtum* in den Archiven von Mari und Chagar Bazar”, *UF* 32 (2000), 243-260 を参照。
- (41) 中田一郎「マリ文書に見られる *tēbibtum* について」『中央大学文学部紀要』35 (1990), 18。
- (42) (28') [*ḥa-la-aš sa-g*]*a-ra-tim*^{ki} (29') [*il-*]*tim*^{ki} (30') [*ki-*]*re-e-tim*^{ki} (31') [*d*]*i-im-tim*^{ki} (32') *zi-ib-na-tim ša i-la-sa-kar* (33') *ba-ar-ḥa-an*^{ki} (34') *ḥu-ra-an*^{ki} (35') [*d*]*a-bi-ša-an*^{ki} (36') [*yu-*]*um-ḥa-mi*^{ki} (37') *ni-ḥa-di-i*^{ki} (38') *til-la-zi-bi*^{ki} (39') *na-ra-a*^{ki} (40') *é ag-gā-ak-ka*^{ki} (41') *bād-ia-aḥ-du-un-li*^{ki} (42') *ia-a-il ù za-ni-pa-tim*^{ki} (43') *é za-ar-ḥa-an*^{ki} (44') *zi-ib-na-tim*^{ki} (45') *bi-da-aḥ*^{ki} (46') *ša-am-da-ni-tim*^{ki} (47') [*s*]*a-ḥa-ri*^{ki} (48') *te-bi-ib-tum gibil* (49') *ša ḥa-la-aš sa-ga-ra-tim*^{ki} 「サッガラートゥム地区, 地名×7 (29'-35' 行), ヤムハンムー, ニハド, 地名×10 (38'-47' 行), サッガラートゥム地区の再 (ノ新) テービプトゥム」。
- (43) A. M. Alba, “La localisation des terroirs Benjaminites du royaume de Mari”, *Amurru* 3 (2004), 225-234.
- (44) 6-13:「ヤミン人にテービプトゥムを行うことに関して, お前は書き送ってきた (*aš-šum dumu.meš ia-mi-in ub-bu-bi-im ta-aš-pu-ra-am*)。ヤミン人にテービプトゥムを行うことは適当ではない。お前が彼らのテービプトゥムを行うと, 川の向こうのヤムハドの地にいる, 彼らの兄弟であるラバヤ人 (*a-ḥu-šu-nu lú.meš ra-ba-ba-ia*) がそれを知

き、彼らに対し苦々しく思い、自分達の国に帰ってこないだろう。彼らのテービブトゥムを行ってはならない。」

- (45) 10'-14':「サフルーのアンナヌム氏族の兵士達のテービブトゥムの実施に関して (aš-šum ša-bi-im AMx (=PI) -na-na-i^{ki} ša sa-aḥ-ri-i^{ki} ub-bu-bi-im), 彼らのスガーグムに 5 回手紙を書き送りましたが、彼らはやって来ませんでした。」

- (46) 22-29:「ユーフラテス河岸の耕地を(再)分配し、兵士たちの耕地を没収するように、私がお前に書き送った件に関して、お前は次のように書き送ってきた (aš-šum a.ša.ḥi.a ša a-aḥⁱ[^dbura]nun za-z[i-i]m ū i-na a.ša.ḥi.a [š]a ša-bi-[i]m ša-ba-[ti]m ša aš-pu-ra-a[k]-kum ki-a-am ta-aš-[pu-r]a-am)。」

- (47) 5-15:「ヤミン人の町の兵士のテービブトゥムの実施に関して (aš-šum ša-bi-im ša a-l[a]-ni ša dumu.meš ia-mi-na ub-bu-bi-im), 彼らのスガーグムがやって来ました。私は彼らのテービブトゥム実施者(調査官)を任命し、彼らは兵士達を記しました。私は彼らの兵士の台帳を町ごとに記し (tup-pa-am ša ša-bi-šu-nu a-li-ša-am aš-tū-ra-am-ma), 我が主人の許に送らせませす。」

- (48) D. R. Frayne, *RIME* 4, 602.

- (49) D. R. Frayne, *RIME* 4, 605.

- (50) *RIME* 4.6.8.1: (15) 7 lugal.meš (16) ab-bu-ū ḥa.na (17) ša uq-ta-ab-bi-lu-nim (18) ak-mi-šu-nu-ti (19) ma-at-šū-nu (20) a-na i-di-ia ū-te-er (D. R. Frayne, *RIME* 4, 603)

- (51) *RIME* 4.6.8.2: (92) a-lam ḥa-ma-an^{ki} um-ma-at ḥa.na (93) ša a-bu-ū ḥa.na ka-lu-šu-nu i-pu-šu-šu (94) iq-qū-ur-šu-ma (95) a-na ti-li ū ka-ar-mi iš-ku-un-šu (96) ū šar-ra-šu ka-šū-ri-ḥa-la ik-mi (97) ma-sū-nu it-ba-al (98) ū ki-ša-ad pu-ra-tim ig-mu-ur-ma (D. R. Frayne, *RIME* 4, 606)

- (52) (7) ga-me-er (8) gū^{id}buranun.na (D. R. Frayne, *RIME* 4, 602)

- (53) *RIME* 4.6.8.2: (68) ^mla-ū-um lugal sa-ma-nim^{ki} (69) ū ma-at ub-ra-bi-im (70) ^mba-aḥ-lu-ku-li-im lugal tu-tu-ul^{ki} (71) ū ma-at am-na-ni-im (72) ^ma-ia-lum lugal a-ba-at-tim^{ki} (73) ū ma-at ra-ab-bi-im「サマヌムとウブラップムの地の王ラーウム、トゥットゥールとアンナヌムの地の王パハル・クッリム、アバットゥムとラップームの地の王アヤールム。」(D. R. Frayne, *RIME* 4, 606)

- (54) J. N. Postgate, "Royal ideology and state administration in Sumer and Akkad", J. Sasson (ed.), *Civilizations of the Ancient Near East*, Vol. I, New York, 1995, 402.

- (55) この称号を使用しているのは、ラルサの王ワラド・シンの父であるクドゥル・マブクとバビロンのハンムラビの2人。詳細は、M.-J. Seux, *Épithètes royales akkadiennes et sumériennes*, 1967, Paris, 384-385 を参照。

- (56) lugal-da.ga.an-kur-mar.dú の称号は *RIME* 4.3.6.9, 10, 11 で使用されている。

- (57) (12) ḥa.na dumu si-ma-a-al (13) ū ia-mu-ut-ba-lum (14) ḥi-ip-šum a-ḥu-u[m]. デュランは14行の *ḥipšum* は血縁の関係を示す語であろうとしている (*ARM* XXVIII, p. 45 n. a)。

(58) 本論注(15)参照。